

<b>Fantasy</b> ファンタジー
<b>Harold Mabern Trio</b> ハロルド・メイバーン・トリオ
<b>1. 恋をしたみたい</b> Almost Like Being In Love 〈F. Loewe〉(5:08)
<b>2. ハーレム・ドーン</b> Harlem Dawn 〈D. Hathaway〉(7:05)
<b>3. ロリポップス・アンド・ローゼス</b> Lollipops And Roses 〈T. Velona〉(5:20)
<b>4. セサミ・ストリートのテーマ</b> Sesame Street Theme 〈J. Raposo〉(6:33)
<b>5. 宇宙のファンタジー</b> Fantasy 〈M. White〉(6:58)
<b>6. ザ・サイドワインダー</b> The Sidewinder 〈L. Morgan〉(4:58)
<b>7. イット・オンリー・ハーツ・ホエン・アイ・スマイル</b> It Only Hurts When I Smile 〈H. Mabern〉(6:07)
<b>8. 陽気に踊ろう</b> Let's Face The Music And Dance 〈I. Berlin〉(4:11)
<b>9. ジャクソン・パーク・エル・トレイン</b> Jackson Park El Train 〈H. Mabern〉(4:11)
<b>10. あなたは私のもの</b> You Belong To Me 〈P. W. King, C. Price, R. Stewart〉(4:30)

<b>ハロルド・メイバーン</b> Harold Mabern ( piano )
<b>ドゥエイン・バーノ</b> Dwyane Burno ( bass )
<b>ジョー・ファンスワース</b> Joe Farnsworth ( drums )
録音：2004年6月27日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

© © 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

<span>＊</span>
<p>Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded at Avatar Studio in New York on June 27 , 2004. Engineered by David Darlington. Technical Coordinator by Derek Kwan. Mixed and Mastered by Venus 24bit HyperMagnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Cover Photo : © Irina Ionesco / G. I. P. Tokyo. Photos : John Abbott. Designed by Taz..</p>

は脳隔らせる天才なのである。そういえばノラ・ジョーンズの曲をいち早く弾いてみせたのもメイバーンだった。

私は今回まずメイバーンのオリジナルに目をつけた。「イット・オンリー・ハーツ・ホエン・アイ・スマイル」。

いや、これはいいや。メイバーンのもう一つの長所、そして持ち味の哀愁がびっしりではなく極めてひそかに漂っているんだ。初めて聴いたが、ようしこの演奏をして曲目を好きになるぞ。

少し静かな気持ちになって、今度は思い切って「宇宙のファンタジー」に手を出した。ちょっとジャズ・ファンとしては勇気いるものなあ。

いやあ、これがよかった。ピアノ演奏から言えばメイバーンらしさに溢れた一曲である。アップ・アンド・ダウンがよく効いている。それよりなにより曲想が麗しいのが気に入った。

あれ、これ、どこかで聴いたことがあるぞ。それもつい最近である。そうだ、ヴィーナスからも発売されている女流ピアニストのレイチェルZ（レイチェル・ジーと読む）。この人の最新盤『エバーラステイング』に「キス・フロム・ア・ローズ」が入っていたんだ。私の知らない曲であり、作曲者はS. Sealとなっている。作った人もわからないのである。どうも私は今日この頃の新しいポップに弱くて、実はこれが私のアキレス腱なのだが、それはまあいい。

なにはともあれ、曲のよさにグッときてしまうのである。やっぱりジャズも曲だよなあ。インプロヴィゼーションがどうのこうのといっても、大もとの曲がよくなければ折角のジャズの証、インプロも張り切りようがないし、まあそういうことなのである。

メイバーンはこの曲のよさをずっとインプロで纏ってゆく。だから

ハロルド・メイバーンの個人的な体験からお話してゆこう。なに、オマエの文はいつだって個人的なものだろう？ そう、おっしゃるのか。いや、お恥ずかしい。その通りである。私はいつも文章を書く時に戸惑ってしまうのだ。そういう時はどうすればいいか、をいつかにかの本で読んだことがある。

「私は～」で始めればいいというのである。リッパなこと、高邁なこと、さらには気のきいたことを言おうとするから筆がグズッと止まってしまう。いいんだよ、どうせオレなんかリッパなことは言えないんだ、バカさらけ出そう、人はバカを見ると喜ぶんだ、そんなふうを考えて楽になって書き出せばいいんだ、と。

さて、楽になった。肩の力が抜けてきた。いざ、出発だ。

私のハロルド・メイバーン事始めは「イツツ・ア・ロンサム・オールド・タウン」である。ジャズ・ファンのほとんど誰も知らない曲と言っていい。この曲をメイバーンが弾いていたのである。DIW盤の『ルツキン・アット・ザ・ブライト・サイド』だった。これに私は徹底的にしびれたのである。あんまりしびれたので今度出版になる『ジャズ・パー・2004』に取り入れれさせてもらったが、いや、宣伝になって申し訳ない。

まあ、曲としては「ちびた」曲である。要するに低俗で安っぽい。ところがメイバーンの歩幅の大きい、そしてダイナミックな華麗さを持ったピアノでこれが弾かれると、途端になにか18世紀の宮廷音楽のように聴こえたのだ。私は皇帝のような気分になった。

いつまでもDIWの話をしていてもらちが明かない。ヴィーナスの人に叱られてしまう。要するにこの前振りで私が言ったのはこういうことなのだ。メイバーンの楽しみの大きな一つは、彼の採用する曲にある。これである。

ピアノはどうしたって？　ピアノはいつも同じである。メイバーンは生まれた時からこんな弾き方をしてきたのだ。死ぬまでそうだろう。速い曲ではピラピラと蝶が舞うような音を響かせながら、縦横無尽にバウンスし、一転スローなナンバーでは雄大に聴かせたりもする。とめどがない。

ファンはそうした行き先のないメイバーンのピアノに幻惑され、酔うのだが、ふとたまに冷静になってジャズ鑑賞において不毛な分析などしちゃったりすると「なんだ、いつも同じじゃないか」。

いいのである。メイバーンの聴き方は、メイバーンの、まったく彼らしい、今の若手ピアニストには見るべくもない、誰が聴いてもすぐに「あっ、メイバーン」だとわかる、そういうピアノで彼がピックアップするユニークなさまざまな曲を楽しむことにあるのだから。だから、私はいつもメイバーンの新譜を手にと慌ててしげしげと曲の顔面を眺める。さて今回、彼はどんな曲で私を喜ばせてくれるのだろう。

あった、あった。これはさながら花園である。メイバーン畑に咲いた数々の名花。今回はまことに多彩である。そして異彩である。実にもって色とりどりと言うしかない。

「宇宙のファンタジー」ときたものである。「セサミ・ストリート」に「ロリポップ・アンド・ローゼス」「ハーレム・ドーン」に「ジャクソン・パーク・エル・トレイン」。

曲名を見ただけで、聴く前に、ワクワクしてしまう。曲を見ただけで脳が踊るCDなんてそんなにくいこともあるわけではない。メイバーン

最後まで曲のよさを味わってゆけるのである。ジャズ・ファンにとってこれくらい幸せなことはない。曲は好きだが、しかしインプロに入ってついてゆけない。喜びが断絶されてしまう。そんな演奏が日常的なジャズ界なのである。

メイバーンは裏切らない。

会社の人の話によると、曲順はまったくこの通りに演奏されたものだという。普通どこのレコード会社の人も曲の配列には苦勞するらしい。ああでもない、こうでもない。考え過ぎてノイローゼになる人もいる、というのは冗談だが、結局ストーリー展開にこの盤はすぐれているということだろう。起承転結というか。

一曲目にお馴染みのスタンダード・ソングを演奏した。旧来のジャズ・ファンはこれで安心するのである。

二曲目に60年代のダニー・ハサウェイがヒットさせた「ハーレム・ドーン」。ちなみに今回のCDのタイトルについて、会社は『ファンタジー』にするか『ハーレム・ドーン』にするか迷ったらしい。『ファンタジー』のほうがメイバーンにも我々にも新鮮な感じを与える。『ハーレム・ドーン』はらしいことはらしいが、昨今はマンハッタンだ、ニューヨークだ、ハーレムだと陳腐があふれているから『ファンタジー』でよかったと思う。なんたって聴きどころは「宇宙のファンタジー」でもあるし。

曲名そのものに魅力のある「ロリポップ・アンド・ローゼス」から「セサミ・ストリート」「宇宙のファンタジー」、そして「サイドワインダー」は中間部の盛り上がり部分である。我々としても、このテンションに満ち、そして隆起した部分を一気に聴くのが極意である。

フーと息を一息ついて、先に私が絶賛したバラード・ナンバーに到着する。これは、バラードな気持ちで聴くに限るのである。本人もバラードな気分で弾いているのだ。弾き手と聴き手の気持ちがびったり一致した瞬間。それにしても何度も言うが、この曲想、絶品である。もの悲しい、悲しい中にほのかなうれしさも混在している。こういうのを名曲というのである。隠れた名曲。こうした名曲を探し出し、折にふれて耳にするのが、ジャズ・ファンの喜びと言わずしてなんと言おう。なにかしら勇気もわいてくるぞ。

「レッツ・フェイス・ザ・ミュージック・アンド・ダンス」。「ロシアの子守唄」を作曲したロシア出身のアーピング・バーリンの作だが、低く地面をさまようような「ロシアの子守唄」に対して、大地を大股で歩くような「陽気に踊ろう」。これが邦題とは知らなかった。うまい訳である。メイバーンはあまりテンションを上げず地道に弾いている。バラードから一気に気分を急上昇させなかったのだ。

「ジャクソン・パーク・エル・トレイン」。さあ、また手が動き出した。この曲名、「ロリポップ・アンド・ローゼス」と同じくらい私は好きである。夢がある。風景を目の前に描き出す。アメリカの田舎のランドスケイプ。メイバーンはタイトルでジャズ・ファンを「いかせて」しまうのだ。

最終曲の「ユー・ピロング・トゥ・ミー」。これは私の得意の曲である。古いアメリカン・ポップス。ジョー・スタッフォードなどが歌っていた。こうした古いポップ曲が私は得意なのである。しかし、これをジャズとしてプレイしたミュージシャンは非常に少ない。やらないというか、やれない。勇気もない。メイバーンは敢然と挑戦する。「曲で楽しませる」メイバーンの面目が躍如としているではありませんか。

寺島靖国